

---

# 仕返し屋・消去屋

うわの空

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仕返し屋・消去屋

### 【Nコード】

N4529U

### 【作者名】

うわの空

### 【あらすじ】

「誰を怨んでるの？私が復讐してあげましょうか。私、仕返し屋なんだよ」

## 0 (前書き)

この小説は、間違えて短編小説として投稿したものを、長編小説として投稿しなおしたものです。大変失礼しました。

私が最期にいた場所は、とても狭くて暑苦しくて、息をするのも苦しい所だった。暗くて、なにも見えない箱の中。外から聞こえるのは男の人の怒鳴り声と、泣きながら何かを訴えている女の人の声。

その声が、自分の母親のものだということは、もちろん知ってた。怒鳴っている男の人は、私の父親ではなかった。

箱の中で、私は精いっぱい大きな声をあげて泣いた。どうにかしなくちゃ、と思った。自分のことも、おかあさんのことも。

「うるせえんだよ!!」

怒鳴り声と同時に、大きく揺れる箱。私の体は急にふわりと軽くなって、それから地面に叩きつけられた。

泣くのをやめてしまえば、私への攻撃はなくなるかもしれない。だけど私は泣き続けた。

「お願い、もうやめて!!」

おかあさんの悲鳴のような声が聞こえて、それからゴソツッ!という鈍い音が聞こえてきた。殴られたんだ、と瞬時に理解した。

やめて。おかあさんをいじめないで。

私は一層激しく泣いた。どうにか私に目を向けてもらえるように。あの人がおかあさんから離れるように。

私に近づいてきた乱暴な足音は、おかあさんのものではなかった。

大きな足で、箱ごと蹴られた衝撃。頭の中身が揺さぶられるような感覚。私は口から、生ぬるくてどろどろしたもの的大量に吐き出した。頭と胸が痛くて息ができない。苦しい。

遠くの方で、おかあさんの叫び声が聞こえていた。

私の名前を、呼んでいた。

だけど、私はもう、泣けなかった。

「咲」

俺が声をかけると、ベッドの上で編み物をしていた彼女はゆつくりとこちらを向いた。そしてほほ笑む。だけどそれは嬉しいからではなく、ただ「ほほ笑む」という動作をしただけのようだった。

「俊しゅん」

わずかに口を開いて、俺の名前を呟くように言う。相変わらず顔は笑っているが、目は俺の方を見ていない。

俺は彼女の編み物の方に目をやる。子供用の靴下。…これで何足目だろう。

「プリン買ってきたんだ。食べる？」

そう言うと、彼女は頷いた。俺はベッドの側にあるパイプ椅子に腰掛け、買ってきたプリンを取り出した。どこのコンビニにでも売ってる安物のプリンだけど、彼女は昔からこれが一番好きだった。

彼女はプリンを受け取ると、パッケージに描かれているひよこの絵を見て動きを止めた。顔はほほ笑んだままなのに、大きな目からぼろぼろと涙が溢れ出す。

「俊、ごめんね」

彼女は両手で頭を抱えた。ベッドからプリンが転がり落ちる。彼女はがたがたと震えながら、ごめんねと言い続けた。

「咲」

「ごめんね、ごめんね」

俺の声は彼女には届いておらず、彼女の震えはどんどん大きくなる。俺は立ち上がり、震える彼女を抱きしめた。そうしないと、彼女はバラバラになって壊れてしまいそうだった。

「ごめんね、ごめんね、赤ちゃん、死んじゃった…」

言い終わると、彼女は悲鳴をあげた。

あの事件から2年。そして、彼女が精神科に入院してから1年半が経とうとしていた。時が経てば薄らいでいくのだろうと思っていたこの感情は、日を追うごとに強くなっていく。いくら時間が流れても、彼女も俺も、…あの子も、救われることはない。

日本では胎児を殺しても、死刑にはならない。どれだけ悪意を持っていても、命を奪っても、胎児ならば死刑にはならない。殺人罪ではなく、墮胎罪。胎児は人ではないのだ。…法律の中では。

「ふざけんなよ…」

泣き腫らした目で眠る彼女を見ながら、誰にも聞こえないように呟く。俺たちの子供を殺したあの男は、これからもへらへら笑って生きていくんだ。人殺しの、くせに。

「ふざけんな」

絶対に許さない。いつか絶対に復讐してやる。

殺して、やる。

その子と初めて会ったのは、咲の見舞いに行った帰りだった。

「ん？」

かなり目立つ格好をした女の子が、人通りの多い道端に座り込んでいた。

小学校低学年くらいに見えるその女の子は、一言で言うなら「かわいらしい女の子」だった。少しだけ釣りあがった、けれども大きな瞳は、まるで子猫のようだと思った。肩にかかっている黒い髪はストレートで、∴これだけならどこにでもいる女の子だ。問題は、その子の恰好だった。

その子は、黒いドレス姿だったのだ。全体的に黒いと思ったが、よく見るとスカートのフリルは白い。足元には、黒いエナメルの靴。「不思議の国のアリス」をモノクロにしたようなその姿。えーっと、なんていうんだっけこういうファッション。∴ゴスロリ、だったかな。

俺からすればかなり浮いて見えるその子だが、周囲の人々はその子に構わず通り過ぎていく。チラ見する人すらない。目を丸くしているのは俺くらいだ。

∴ああいうファッションが、小さい子の間で流行ってるんだろうか。

俺は素通りしようとして、だけどやっぱり気になって、通り過ぎる前にもう一度彼女の方を見た。彼女もこちらを見上げていて、目があったってしまった。

「…こんにちは」

透き通るような高い声。彼女は、その幼い顔には似合わないような落ち着いた笑顔で、俺にあいさつしてきた。

「あ、こんにちは」

俺がそう返すと、彼女はにっこりと笑った。それから

「私のことが見えてるのね」

そう言っつて、くつくつと笑った。

「え？」

戸惑っている俺に微笑みながら、彼女は立ち上がる。それから、俺のすぐそばまでゆっくりと歩み寄ってきた。俺は後退しようとして、だけど金縛りにあったかのようにその場から動けなかった。

「誰を怨んでるの？」

彼女は俺の目の前に立つと、確かにそう言った。

「…え？」

「誰かを、殺したいくらい怨んでるでしょ」

彼女は俺の目を覗き込むように見た。思わず、目をそらす。それを見て、彼女はまた楽しそうに笑った。そして言った。

「復讐、してあげましょうか」

幼い顔には似合わない言葉に、俺は驚いて彼女の方を見下ろす。

彼女の身長はかなり低く、俺の腰の高さに顔があった。

彼女は俺の顔を見て、綺麗な顔でほほ笑んだ。そして先ほどと同じ言葉を、もう一度繰り返した。

「復讐してあげましょうか。…私、仕返し屋なの」

「仕返し屋…?」

少女はこくりと頷いた。

「そう。あと、消去屋でもある」

「なんだそれ」

俺がそう言うと、少女はあたりを見回した。それから

「お兄さん、周りの人から変な目で見られてるわよ」

そう言われて、俺も周りを見回す。何人かの人と視線がぶつかりかけて、お互いあわてて眼をそらした。たしかに、道行く人から変な目で見られているようだった。

俺の様子を見ていた少女が、くすくすと笑う。

「周りの人から見たら、ずっと独り言を言ってる人みたいだもんね、お兄さんは」

「どういうことだ…?」

「私の姿はね、『お客様』にしか見えないのよ」

そう言うと、彼女は俺の手を握ってきた。

「ね。お兄さんのお部屋に連れてってよ。そこでお話ししましょ?」

「だけど君…」

「だいじょうぶ。私、幽霊だから」

何が大丈夫なのか。第一、自分に霊感なんてないはずだ。困惑する俺の腕を、少女は強く引っ張って放さない。俺はあきらめて、彼女と一緒に歩き出した。

途中、ガラス張りの美容院の前で気がついた。

俺の横を歩いている少女の姿が、ガラスには映っていないことに。

「広いお家！」

マンションに到着すると、少女が嬉しそうに笑った。彼女は部屋に土足で上がっているが、足音がしない。…やっぱり

「本当に幽霊なのか？」

「そうよー」

彼女はリビングをうろろしながら、どうでもよさそうに言う。

「名前は？」

そう訊くと、彼女の動きがぴたりと止まった。俺の方を振り返って、口だけ歪ませてほほ笑む。それから透き通るような声で、自分の名前を言った。

「アリス」

…服装にぴったりな名前だと思う。が、

「それ、本名か？」

「さあ？」

女の子は首をかしげて、くすくすと笑った。

「それで、お兄さんは誰を怨んでるの？」

アリスは俺に断りもせずソファーにどかっと座ると、こちらを見上げた。俺はしばらく考えてから、彼女の隣に座る。そして尋ねる。

「どうして分かった」

「え？」

「俺が誰かを怨んでるって、どうして分かった」

「それも殺したいほど怨んでるのよね、お兄さん」

アリスはそう言うと、自分の顔を指差した。

「私のこと、見えてるでしょ？」

「…ああ」

「私の姿はね、『誰かのことを強く怨んでる人間』にしが見えないのよ」

俺は黙り込む。彼女の話が正しいのかどうかなんて、分からない。ただ、嘘を言っているようにも見えなかった。彼女は黙り込んでいる俺に向かって、話を続ける。

「そしてそういう…」誰かのことを強く怨んでる人間』は、私にとってはお客様なの」

「さっきも言ってたな、どういうことだ」

俺の言葉を聞いて、彼女は嬉しそうに笑う。

「あなたの代わりに仕返しを、あるいは嫌な記憶を消去するのが、私の仕事なの」

誰かを怨んでるとする。それも、殺したいほど。そういう場合、人間がやることは大きく分けると三つ。

殺してしまうか、少しずつ復讐するか、諦めるか。

「諦める、が意外に多いんだよね。復讐する場合、自分の手を汚すことになるから」

アリスはそう言うと両手をあげてソファーから勢いよく立ちあがり、

「そこで私の登場！あなたの代わりに、仕返しします！」  
明るい声で叫んでから、小さな声で付け加えた。

「もちろん、仕返しそれが殺しても、やるわ」

その顔は、笑っていなかった。

「…俺の代わりに？」

「私が復讐するんだから、完全犯罪よ。だって私、幽霊だし」

彼女は楽しそうに笑う。俺は、笑えなかった。

「人の代わりに復讐をする。それが、仕返し屋なの」

彼女は、右手の人差し指と中指を立てて笑った。

「私にできることは二つあるの。ひとつは復讐で、それが仕返し屋。

もうひとつは、【誰かの記憶から、誰かの存在を消すこと】」

「存在を消す…？」

俺はぼんやりとした声を出す。アリスはそんな俺を見て、苦笑しながら言った。

「例えば、【あなたの記憶から、あなたの母親の存在を消す】をしたとする。そしたらもう、あなたは誰が何を言っても、母親の顔を見てても声を聞いてても、母親のことを…母親との記憶を、思い出せな

くなる」

「母親のことを忘れるってことか」

「そう」

彼女は頷き、そつと目を伏せた。

「ただし、できるのは「一人の記憶から、一人の存在を消すこと」だけ。1対1。つまり【あなたの記憶から、あなたの両親2人の存在を消す】というのはいできない。…それから」

少しだけ、彼女の声が低くなる。

「一度消すと、二度とその記憶は取り戻せなくなるから注意してね」

そう言い終わると、彼女はまるで力尽きたようにソファアの上にどさつと座った。フリルのついたスカートが、少し間をおいてから彼女の脚の上に落ちる。

「もしもあなたが復讐したいんじゃない、そういう怨みつらみを忘れて平穩に生きたいなら、私はそれをお手伝いすることができる。【あなたの記憶から、あなたが怨んでいる人の存在】を消せばいいの。そうすればあなたは、辛いことは全部忘れられる。それが、消去屋の仕事」

「そんなこと、本当にできるのか？」

「できるよ。私にはその力があるの。ただし、両方の仕事を請け負うことはできない。仕返し屋か消去屋、どちらかにしてね」

彼女の顔はどこまでも真剣だった。それを見て、俺は黙り込む。

「…どっちにするかはお兄さんが決めて」

「どちらか一つ、しかできないのか」

「そう。仕返しか消去、どちらか一つ。両方はできない。…そんなの、ずるいからね」

「え？」

彼女はため息をつく、蔑むような声を出した。

「結構いるんだよね。復讐と消去、両方頼もうとする人。『あいつに復讐してくれ。それが終わったら、俺の記憶からあいつの存在を」

消してくれ』ってね。…残酷な復讐をしておいて、自分はそれをきれいさっぱり忘れて生きよつだなんて、いくらなんでも無責任だと思わない?」

「…。」

「誰かを不幸にしたのなら、…殺したのなら、一生それを覚えているべきよ」

憎しみのこもった低い声で、彼女は吐き捨てた。

仕返し、あるいは消去。選べるのは、どちらか一つ。

「どっちも選ばない、もありなのか？」

「もちろん。その場合は縁がなかったってことね」

彼女はそう言うと、窓の外を見た。紺色の混じったオレンジ色の夕空に、飛行機が飛んでいるのが見える。それを見ているのかいないのか、彼女は窓から目を離さない。

「…もしも復讐を頼むとして、代金はどうなる？」

「それは、…殺せてこと？」

彼女がこちらを向いた。酷く、真剣な顔で。

「もし、そうなら？」

俺は額に浮かんでいた汗をぬぐいながら、尋ねる。彼女は楽しそうに、目を細めた。

「人の命を奪う場合。対価は、あなたの命だよ」

彼女が冷たい笑顔でそう言った。一瞬、時間が止まる。

「…なーんて」

彼女はけらけらと笑うと、俺の顔を覗き込んだ。

「仕返しの場合でも消去の場合でも、対価は一緒だよ。丸一日、私と一緒に遊んでくれるだけでいい」

予想外の答えに、眼を見開く。

「遊ぶ？それだけでいいのか？」

「うん。遊園地とか動物園とか、そういうところに連れてってくれたらうれしい」

彼女はそう言いながら、白い歯を見せてにかつと笑った。

「で、どうする？」

「…。」

「決められない？」

俺が無言でいると、彼女がうんうんと頷いた。

「ゆっくり考えてくれていいよ。復讐でも、消去でも」

「…消去を選択するとして」

俺はゆっくりと、彼女の方を向いた。

「俺以外の誰かの記憶を、操作することも可能なのか？」

アリスが少しだけきよんとする。それから、

「具体的には？」

「…俺の、奥さんの記憶、とか…」

そう言うと、アリスは納得したように頷いた。

「できるわ」

消去、という言葉聞いた時から、考えていたことがあった。

彼女の記憶から、あの子の存在を、…俺たちの子供の存在を、消せたなら。

「俊、私、妊娠した」

会社から帰ってきた俺を最高の笑顔で迎えた咲は、お腹に手を当てながらそう言った。

「本当か!？」

「うん」

はにかんだような笑顔。俺は嬉しくて、咲を抱きしめた。

「ねーねー。あなたが私を使うかどうか決めるまで、私、ここに住んでもいい?」

アリスが部屋を見渡しながら、俺に向かって言った。

「…別にいいけど」

「やった!」

一人で住むには、この家は広すぎる。誰かがいたほうがきつと、気も紛れるだろう。

俺が承諾するとアリスは嬉しそうに、ソファアの上に寝転がった。

「私、ここで寝る」

「幽霊でも寝るのか?」

俺が苦笑しながら尋ねると、アリスは上半身だけむくりと起こした。

「寝るよー!あ、襲わないでね」

「誰が…ていうか、お前幾つだよ」

俺がそう言うと、アリスは指を折って何かを数え始めた。それから

「えっとー、幽霊になってる時間も入れると、25歳くらい?」

首をかしげながら、指を折りながら、言う。どうも計算は苦手らしい。

アリスがソファアールの上にあるクッションで遊んでいる間、俺は色々と考えた。

仕返し屋。そして、消去屋。頼むならどちらにすればいい。もしも、もしも仕返し屋に頼むなら…。

「ねえ、なんで人を怨むようになったの」

ソファに仰向けに寝転がって天井を見ながら、アリスが言ってきた。

「…まだ仕事を頼んだ覚えはないぞ」

「分かってる。訊いたのは、単なる好奇心だよ。答えてくれなくてもいい」

「…。」

沈黙が続くと、時計の秒針の動く音がやたらと大きく聞こえる。俺はため息をついた。

「俺の奥さんには、子供がいた。妊娠してたんだ」

そう言つと、アリスが勢いよく上半身を起こした。

「それで？」

「…咲は…医者から、妊娠できないとずっと言われていたんだ。だから子供ができた時、俺も咲も喜んだ。だけど…」

「…なにかあった」

「夕方、スーパーの帰り道で咲は強姦された。そのショックで流産した。そして、二度と子供の産めない体になった」

俺の声は自分でも驚くほど、酷く冷たかった。



病院に駆けつけた時には、全てが終わっていた。

俺が病室に入ると、ベッドの上で天井を見ていた咲がこちらに目を向けた。顔は酷く腫れていて、その表情は虚ろだった。

「咲…大丈夫か」

大丈夫なはずがない。なのに、他になんて声をかけたらいいのかわからなかった。

「…ごめんね。私が、不注意だったの」

今にも消え入りそうな声で、咲がつぶやく。俺はベッドに近づいて、咲の手を握った。

「咲のせいじゃない」

「赤ちゃん、死んじゃった」

「咲のせいじゃないよ」

「ごめんね、ごめつ…」

泣きじゃくる咲を、俺はただ抱きしめてやることしかできなかった。

「誰でもよかった。眼に付いた女を車の中に引きずり込んで、数回殴った。それから、強姦した。妊娠しているなんて知らなかった。

…気持ちよかった」

唸るように低い声で、俺はその言葉を口にした。何度繰り返したのか分からないそのセリフは

「咲を犯した奴の言ったセリフだ」

アリスは黙って、俺の方を見ている。

「当時19歳。今は…21歳かな。そいつに、俺たちの子供は殺さ

れた。でも、法的には殺人罪ではなくて墮胎罪だ。殺人罪に比べて、刑は軽い。強姦だって、死刑になることはまずない」

怒りで声が震え始める。息をするのが苦しい。なのに、吐き出す言葉は速度を増していく。

「俺たちの子供を殺して、咲の精神を壊して。それでも奴は軽い罪に問われるだけ。今でもあいつは、のうのうと生きてるんだ。俺は」「許せない?」

不意にアリスが口を開いたので、俺は驚いてアリスの顔を見る。クツシヨンを抱えた格好で座っているアリスは、何故かとても悲しそうな顔をしていた。いつものような笑顔では、なくて。

「…殺してやりたいと、思った。何度も」「声がかすれる。」

「だけどそれをしたら、俺も奴と一緒にだ。ただの、殺人者」「うん」

アリスは静かな声で頷いたあと、「……」「……」

「……お前に復讐を頼んだ場合、どんな風に行うんだ?」

俺が尋ねると、アリスは少し考えてから、早口で言い始めた。

「殺さない場合でも殺す場合でも、思いつきり痛めつけるよ。そうだね……、まずは爪を剥ぐかな。それから、指を1本ずつ折る。で、片目を潰す。潰す時は針を使ってゆっくりと。……まだ聞きたい?」

「……いや、いい」

俺はため息をついた。復讐、……復讐。あれだけ考えていたのに、

「お兄さんはさ、多分、あんまり復讐は似合わないよね」

クツシヨンを抱えたまま、アリスが口を開く。

「少しでもためらう気持ちがあるのなら、復讐はやめておいた方がいいよ。後悔する」

「……」

「仕返しをしないのなら…消去の方かな？さっき、奥さんの記憶が  
どうこう言ってたよね。何を消したいの？犯人の存在？」  
「…いや」

俺は額に手を当てる。きつと、忘れた方がいいのは

「俺たちの子供の、存在だ」

アリスの顔が、一瞬だけはっきりと曇った。

「咲が気にしているのは…子供のことなんだ。咲を襲った犯人の存在を消去しても、子供を流産した記憶は消えないんだろ？」

「うん」

アリスがいつもよりも低い声で答える。その顔は無表情だ。気になっただが、俺は話を続けた。

「だったら、お腹の中にいた子供のことを忘れさせた方がいいんじゃないかって…。一応聞くが、【咲の記憶から、胎児の存在を消す】というのはできるのか？」

アリスが一瞬だけ、下を向いた。それから

「…できるよ」

薄く笑いながら、顔をあげた。また黙り込む俺を見て、アリスがため息をつく。

「ねえお兄さん、いいこと教えてあげようか」

「…なんだ？」

「人間はね、2回死ぬんだよ」

アリスがゆっくりと立ち上がる。

「…どういうことだ？」

「それは自分で考えて」

そう言い残すと、アリスはリビングから出ていった。

適当なドアを開けると、ベッドが二つ見えた。寝室かな、と思いつつ中に入る。私が家の中をうるちよろすることについて、彼はあまり文句を言わない。というか、文句を言う余裕がないんだろうと

思う。

ベッドサイドにある机の上に、手編みらしい小さな靴下を見つけた。黄色、黄緑色、オレンジ色。何足あるのか数えるのが面倒なくらいある靴下それを、ひとつ手にとってみる。それから、いつ作ったものだろうかと考えた。子供ができたとき分かった時？それとも、その子が死んでしまっただけから？…あるいは、その両方。

「…愛されてたんだね」

リビングにいる彼には聞こえないように、ぼつりと呟く。それから、笑う。

辛いのは、1度目ではなくて、むしろ2度目のほうだった。

「幽霊には、人の記憶を消す力があるのか？」

朝のさわやかな空気にはそぐわない土色の顔で、彼が呟くように尋ねてきた。質問に答える前に、気になったことを口にする。

「お兄さん、昨日は眠れなかった？」

頷く彼を見て、内心で苦笑する。それと同時に、この人はどれだけ真面目なんだ、とも思う。

「質問なんだったっけ。…ああ、人の記憶を消す話ね。普通の幽霊にはね、そんな力はないよ。私は特殊なの」

「どうして君だけ」

「悪魔に魂を売ったから」

不思議そうな顔をする彼を見て、ほほ笑む。これ以上話す気は、なかった。



「悪魔に魂を売ったから」

そう言ったきり、アリスは何も言わなくなった。俺は話を聞くのを諦めて、テレビをつける。今日は土曜日で、気持ちのいい快晴。お出かけ日和。ただ、日中は日差しがきついで帽子を持っていきましよう…。アリスはテレビの前に座り込んで、キラキラした顔で画面を見ていた。俺は、アリスの視線の先にあるものを見る。彼女が見ているのは美人なニュースキャスターではなくて、その後ろに映っている象だった。

「…象が好きなのか？」

俺が話しかけると、アリスはテレビから目を離さずに

「実物は見たことないけど」

そう言った。

「見たことない？本当に？学校の遠足とかで動物園に行かなかったか？」

俺の声を聞いて、アリスはやつとテレビから目を離した。俺の方を見上げて、それから蚊の鳴くような細い声で言った。

「だって私、死んだ時はまだ1歳にもなってなかったもの」

「…え？」

「25年間、幽霊として彷徨さまよってるの。…私、7、8歳に見えるでしょ。この姿はね、仮の姿なんだよ」

そう言うと、悲しそうに笑った。

1時間後、俺とアリスの目の前には大きな象がいた。

マンションの近くに、そこそこ大きな動物園があったのだ。アリスに本物のゾウを見せてやりたくて、…俺は現実逃避がしたくて、動物園にやってきた。ちなみに入園料は、俺の分だけで済んだ。周りから見れば、28歳の男が一人で動物園を回ってるように見えるんだろう。

土曜日だというのに、客はそんなに多くなかった。もうじき夏休みだから、夏休みに向けて今は外出を控えてるのかな、子供のいる家庭は特に。と、勝手に想像する。

アリスはテレビの時よりも一層目を輝かせて、象を見ていた。

「ね、ね。ゾウって本当に耳が大きいね!!」

「…普通、鼻が長いねって言うんだよ」

俺が苦笑すると、アリスはきよんとした。

「でも、耳も大きいよ」

「…まあなあ」

耳をパタパタさせているゾウを見ながら、俺はため息をついた。

ソフトクリームでも買ってやるうかと提案すると、アリスは嬉しそうに笑ってから首を横に振った。

「食べられないから、いい」

食べられないというのはきつと、好き嫌いの意味ではなくて、彼女が幽霊だからだろう。

「でもうれしかった。…対価として丸一日遊んでねって言うと、みんな大概公園に連れて行ってってくれるんだよね。お金がかからないから」

「…一応言っとくけど、これは対価のつもりじゃないからな」  
「分かってるよ」

アリスは苦笑すると、園内を見回した。

「でも今日、動物園に来て本当にうれしいよ!楽しいし。ありがとうね、お兄さん」

そう言つて、彼女はキリンの方へと走つて行つた。俺はその様子を、後ろから眺めていた。

もしも俺たちの子供が無事に産まれていたのなら、咲と子供と俺の3人で、この動物園に来ていただろうか。咲は、そういうことも考えていただろうか。

動物園とか、遊園地とか、海とか、いろんなところに連れて行って。いっぱい笑つて、いっぱい悩んで。

もうできないそれを、彼女は今でも考えたりしているのだろうか。夢に見たりするのだろうか。

…忘れさせてあげた方が、いいのかもしれない。

幸せになるはずだった記憶は、今の彼女にとってはきっと、残酷なものではないから。

夕方。俺はアリスを連れて、咲のいる病院に行った。

「ここに、お兄さんの奥さんがいるの？」

「そうだよ」

『田所 咲』と書かれている部屋の前に来て、俺は立ち止まる。それからゆっくりと、ドアを開けた。

相変わらず虚ろな目をしてベッドの上に座っていた咲は、俺の方を見てほほ笑み、それから俺の後ろを覗き込んだ。

「…その子、だれ？」

そう言われて、ぎょっとする。俺の後ろにいるアリスを見ると、彼女はまっすぐ咲の方を見ていた。

「あ、えつと」

「…お母さんのお見舞いに来てただけど、帰り道が分からなくなっちゃったんです。だから、お兄さんに送ってもらおうと思って」  
アリスは子供のような無邪気な笑顔で、さらりとそう言った。よくそんな嘘がさらつと出たなと思いいながら、俺は咲の方に目をやる。咲は嘘だと分かっているのかいないのか、じっとアリスの方を見て

「…そう」

一瞬だけ微笑み、自分の手元に視線を戻した。その手には、作りかけの小さな靴下。アリスがそれを複雑な顔で見ていることに、俺は気付かなかった。

「お姉さん、私のことが見えたね」

病院からの帰り道で、アリスが地面を見ながら言った。周囲に人はいなかったが、俺は小声でアリスに返事をした。

「びっくりしたよ。見える人には見えるんだな」

その言葉を聞いたアリスは立ち止まり、俺の顔を見上げた。それから静かな声で言った。

「私が見えるってことは、誰かを怨んでるってことよ」

その言葉を聞いて、アリスを見下ろす。アリスは笑わない。

「…咲もやっぱり、あいつを…犯人を怨んでるってことか？」

「違う」

アリスは即答した。きっぱりとした口調で。

「だけど、それ以外に誰のことを怨んでるって言うんだよ」

俺の言葉を聞いたアリスは、がっくりと肩を落とした。分かってないのね、と小声で言う。

「あの人は、自分のことを怨んでる。自分の不注意で、事件が起きたと思ってる。自分のせいで、赤ちゃんが死んだと思ってる。…自分を、怨んでる」

そう言うのと、大きく息を吐いた。

「あの人には私の姿が見えてる。つまり私にとっては、あの人も『お客様』よ。…あの人から、仕事を受ける気は今のところないけど」

「どういう…」

俺が最後まで発言する前に、アリスが口を開いた。荒い、感情のこもった声で叫ぶように。

「あの人はきつと、「自分に仕返しをする」ことを要求するからよ。あの人は犯人のことを怨んでない。ただ、自分のことを責めてる」

だんだんと早口になっていく彼女を、俺はぼうぜんと見降ろす。

「きつとあの人は、消去を選ばない。復讐を選ぶ。私は自殺の補助はしたくないの。そういうのはもう、見たくない…！」

言い終わると、アリスは頭を抱えて地面にしゃがみこんだ。小さな肩が震えている。おかあさん、と消え入るような声で呟くのが聞こえた。

「…アリス？」

彼女の隣に、俺もしゃがみこむ。アリスは赤くなつた眼をこすつ

て、笑った。

「靴下、すごく上手に作るよね、あの人」

「靴下？」

唐突なその発言に、俺の頭はついていけなかった。アリスは立ち上がって、しゃがみこんでいる俺を見下ろす形で言った。

「赤ちゃんのことを忘れたら、あの方は幸せになれるのかな？」

俺は、答えられなかった。

初夏とはいえ、段ボールの中はとても暑くて、息苦しかった。

段ボール箱に入れられた私は、とにかく泣き続けた。母の再婚相手は酷く鬱陶しそうな顔をして、吸っていた煙草を乱暴にもみ消した。それからこちらに近づいてきて、私の入っている箱を蹴り飛ばした。

母の悲鳴。うるさいと怒鳴る声。そして、殴られる音。母の再婚相手は、結婚前はとても優しくかった。けれど結婚してから、豹変した。子供はうるさいから嫌いだと言って、私を段ボールの中に入れた。やめてくれと懇願する母の顔を、思いつき殴りつけた。そして毎日、お酒を飲んだ。

何故かは分からないけれど、私はこの記憶を、上から見るとような形で覚えている。

不機嫌そうな男の顔も、泣き続ける母の顔も、鮮明に覚えている。段ボールの中に、いたはずなのに。

泣き続けなきゃ。そう思っていたはずなのに、泣けなくなったのはいつだっただろう。

私は死んだ。段ボール箱の中で。

それが発覚して、男は逮捕された。だけど、その男からの暴力と

私の死で憔悴しきった母は、何度も自殺しようとした。やがて閉鎖病棟に隔離された母は、一日中私の名前を呼び続け、そのあと泣き叫んだ。

子供の魂は、天国に行く。だけど私は母のことが気かりで、現世にとどまっていた。そして毎日、母の様子を見ていた。何もできない自分の非力さを嘆きながら。

『お前の願いを、叶えてやろうか』

その時だった。声が聞こえたのは。

悪魔との契約。条件は、「天国に行くのも地獄に行くのも放棄すること」。私は永遠に、浮幽霊として現世をさまよい続けることになった。

そのかわりに手に入れた、2つの力。

復讐と、消去。

浮幽霊になった私はまず、男のもとに向かった。そして、刑務所の中でへらへらと笑っている男を、トイレの中で処刑した。悲鳴を上げられないように、まずは声帯をつぶす。それから爪を剥ぎ、指を折り、目をつぶし、耳を引きちぎった。声にならない声で、叫び続ける男。：人間に最上級の苦痛を与えながら<sup>なぶ</sup>鬻り殺す方法を、何故か私は知っていた。

復讐を終えると、今度は母のもとに向かった。そして、【母の記

憶から、私の存在を消去】した。

その日から、母は私の名前を呼ばなくなった。男の暴力で受けた心の傷は癒えないけれど、私の記憶がなくなった分だけ、心の傷は塞がったはずだ。

…これでよかったんだ、これで。

私のことを忘れてしまった母は、私の母だけど、私の母ではなくなった。

本当の父がどこにいるのかは、知らない。会う気もない。

人間は、2度死ぬ。

私は、2度死んだ。

そして、ひとりぼっちになった。

けれど不思議なことに、『人のことを殺したいほど怨んでいる人間』には、私の姿が見えているようだった。

人の憎しみは、消えない。悲しみも、消えない。

私は、私の姿が見える人の依頼を受けては、復讐と消去を繰り返すようになった。

それでも、人の苦しみがこの世から消えることはない。

だから、私は、

日曜日。咲の見舞いに行こうとしたら、アリスが「私もついでいきたい」と言いだした。

病室の前に着くと、アリスは首をひねって少しだけ何かを考えてから、

「私、部屋の外で待ってる」

そう言っただけで笑った。

「…そうか、分かった。じゃあ、またあとで」

「うん。どーぞごゆっくり」

俺に向かって笑いながら手を振ると、彼女は壁にもたれかかり、そのままペタンと床に座り込んだ。

俺が一人で病室に入ると、咲は相変わらず、ベッドの上で編み物をしていた。俺はパイプ椅子に腰掛けて、その様子を眺める。作っているのはいつも一緒で、子供用の靴下だ。

アリスは部屋の外で待っている。俺はドアが閉まっているのを確認してから、咲に小声で尋ねた。

「咲。…子供のこと、忘れたいか？」

子供、という単語をあまり咲の前で使いたくなかった。だけど、訊きたかった。俺の独りよがりの感情で、咲から子供の記憶を消してしまうのは気が引けたからだ。

咲は編み物をしていた手を止めると、ゆっくりとこちらを見た。

それから、首をかしげた。

「…どうして？」

「え…」

「私が忘れたら、赤ちゃんは完全に死んじゃうじゃない。だから、忘れないの」

そう言って、視線を編み物に戻した。

「人間はね、二度死ぬんだよ」

いつかのアリスのセリフが、頭をよぎった。

人間二度死ぬ。一度目は、身体がその活動を止めた時。二度目は、

誰かに、忘れられた時。

咲が子供のことを忘れてしまっても、俺が覚えてる。だから、子供は死なない。

だけど、「咲の中の子供」は、死ぬ。

咲は編み物をする手を止めない。作っているのはいつだって、子供用の靴下だ。

それは彼女が、子供のことを忘れていないから。

彼女の中の、子供は死んでいないから。

彼女の作っている靴下を見て、俺はほほ笑んだ。  
「…そうだな」

復讐も消去も、俺たちには、いらない。

アリスに言おう。そして最後に、遊園地にでも連れて行ってやる。  
う。対価ではなく、…変な言い方だけど、友達として。

「アリス、俺」

ドアを開けると、そこにはもう、アリスの姿はなかった。

きよろきよろと廊下を見渡すお兄さんを見て、私は笑う。

「…私の姿、見えなくなっちゃったんだね」

見えなくなっただということ、彼はもう、私のお客様ではなくなっただということだ。つまり、復讐も消去も放棄したということ。

私は笑った。なんんとなく、こうなる気がしていたから。

「色々楽しかったよお兄さん。…じゃーね」

私は立ち上がり、お兄さんに手を振った。

振り返してもらえないと、分かっていたけれど。

「相変わらず、窒息しそうな部屋でやってるんだね」

茶色いシミのついた白い壁を見て、私は苦笑した。

「探したよ。店の場所を変えたなんて、知らなかった」

「そう言うと、部屋の中央に一人で座っていた少年が苦笑した。」

「お前も相変わらずだな。…まだ、仕返し屋なんてやってるのか？」

「ええ。消去屋も」

「そう言いながら、ドアの近くにあった大きな箱を漁る。大きなダガーを握ると、それを見た彼は何かを思い出したように微笑んだ。」

「なによ？」

「別に。ただ、あんたのところの客になってもおかしくない奴に、この前出会ってさ」

「復讐の方？」

「ああ。自殺した弟の、な」

「ふうん…」

私はダガーを箱の中に放り投げると、彼の方に近づいた。

「やっぱり、あなたは年を取らないんだね。それに、死なない」

「そう言うお前も、成仏しないな」

「…後悔してる？」

「なにが」

「…悪魔と、契約したこと」

空気が、凍った。一瞬だけ時が止まった空間は、彼の笑う声で時間を取り戻す。

「お前と一緒にだよ、多分」

彼はそう言うと、癖のある黒髪をかきむしった。

「…どっか連れてってやろうか？今日は結構客が来たから、金なら

あるんだ」

私は首を振る。そして、目を細める。

「相変わらず、1回一円で殺されてるの？」

「ああ」

「お金もらって、楽しい？」

そう尋ねると、彼は私の方を見上げた。

「お前こそ、対価は『丸一日遊ぶ』だったっけ？…そんなことして楽しいか」

「ええ」

「虚しくなるだけだろ、そんなことしたって。それはただの思い出になるだけだ。ずっと続くような話じゃない」

目を伏せたまま、彼が立ち上がる。私はそれを目で追いながら、言う。

「だけど、思い出にはなる。私が忘れない限り、楽しい思い出のままだよ」

彼は目を伏せ、黙ったままだ。だから私は、そのまま話し続ける。

「私は、この世界で生きてた時の思い出がほとんどないの。だからせめて、アリスとしての思い出はいっぱい作りたい」

「あつそ」

彼はため息をつくと、こちらを見た。

「有栖川ありすがわ…下の名前はなんだった？」

「覚えてない。…今はもう、アリスだよ。それでいいの。もう誰も、

【私】のことを覚えてないから」

「…あつそ」

2回目のセリフは、少しだけかすれていた。

「じゃあね、殺され屋さん。気が向いたらまた来るわ」

私がドアの方へ向かうと、彼が後ろから声をかけてきた。

「これからどうする気だ？」

「んー。とりあえず、復讐しに行ってくる」

「仕事か」

「ううん、ボランティア。…いや違うな、動物園に連れてってもらったから、対価はもらってるし」

初めて見たゾウのことを思い出して、私は笑った。

「仕事はね、断られたの。だけど私が、復讐したくなっちゃったから。あの人たちに、ちょっとだけ情が移っちゃったのかも」

それを聞いた彼が、…アクマが、吐き捨てるように言った。

「…復讐をすれば、新たな憎しみが生まれる。復讐が復讐を生むんだ。…分かってんのか」

「もちろん」

私は彼の方を振り返る。そして笑った。それはまるで、

「だから、仕返し屋はなくなるの。私はずっと、一人ぼっちにはならない」

それはまるで悪魔のような、笑顔で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4529u/>

---

仕返し屋・消去屋

2011年7月13日03時31分発行